

畠山家と七尾城の包囲

能登畠山家の歴史は、内紛と裏切りに悩まされたものでした。能登畠山家は京都出身で、能登国（現在の能登半島）を、1391年から、七尾城が落城する1577年まで統治しました。畠山家は、能登国を統治する間、家臣たちとの権力争いの結果、権力を失いました。家臣間の権力闘争と相互に対立する忠誠から、家臣7名による会議が組織されることとなり、ついには、七尾城の落城と、畠山家による能登統治の終了へと至りました。

山城の建設

畠山義総（1491～1545年）は、1515年に能登畠山家の第7代当主となり、その統治のもとで能登は繁栄しました。義総は、畠山家内での異議を抑えることに成功し、軍事力を築き上げました。義総は、自らの主たる居城として七尾城を建設し、京都から学者を招いて講義を行わせ、職人と商人に七尾への移住を奨励しました。その結果、七尾城のふもとに繁栄する町ができました。また、義総は、七尾湾と富山湾の海運業を管理し、七尾の南にある宝達金山の開発にも貢献しました。七尾と畠山家は、義総が55歳で亡くなるまで、その統治のもと繁栄と安定を大いに享受しました。

不安定な同盟

畠山義隆（1556～1576年）は、1574年に兄が急死したあと権力の座につき、能登畠山家の第11代当主となりました。義隆の兄は家臣によって暗殺されたという説があります。能登畠山家の

新しい当主となった時、義隆はまだ 10 代でした。そして、実権を握っていたのは、重臣 7 名による会議でした。

畠山家は、16 世紀半ばから、重臣たちとともに能登国を統治しました。重臣には遊佐家や長家があり、垣に囲まれた広い敷地を城内に有していました。これらの家臣たちは、権力を得ようと常に画策し、不安定な同盟を結んでいました。遊佐統光（1581 年没）は、能登国の珠洲地方出身の武将であり、重臣 7 名の集団を率いるところまで出世しました。統光の忠誠は、畠山家以外の上杉謙信（1530～1578 年）へと向かっていました。上杉謙信は、越後国（現在の新潟県）出身の有力な武将でした。上杉謙信は、織田信長（1534～1582 年）に対抗していました。信長は、当時日本を統治していた足利幕府を 1573 年に滅ぼした後、日本を自らの統治のもとに統一しようと動いていました。統光が上杉家を支持するいっぽう、統光の義兄弟である重臣の長統連（～1577 年）は織田信長を支持しており、権力闘争が生じました。

包囲される一家

16 世紀末、この国を支配していたのは 2 人の有力武将であり、2 人はそれぞれの行く手にある土地を征服していきました。西にいたのが織田信長、東にいたのが上杉謙信です。畠山家がどちらを支持していたかは明確ではありませんでした。畠山家は、基本的に、対立する家臣たちの支配下にあっ

たからです。上杉謙信は、1576年に、約2万人の軍勢で七尾城を攻撃することに決め、2か月間包囲を行いましたが、城は落とせませんでした。

城壁の中では疫病が起こり、第11代当主の畠山義隆は20歳で亡くなりました。義隆の幼い息子、畠山春王丸(1572～1577年)が新しい当主となりましたが、実権を握ったのは長続連であり、続連が筆頭の家臣の地位に就きました。上杉謙信は、1577年に再びやって来て、七尾城を占領する2度目の試みを行いました。七尾城はほぼ1年間包囲に耐え、その間に続連は織田信長に助けを求めました。

内部の敵

長続連は、七尾城を守るために畠山家の守備隊に加わるよう、七尾の住民たちに強いました。しかし、疫病が守備隊を衰弱させました。幼い春王丸まで倒れて亡くなりました。1577年9月15日、遊佐続光とその仲間たちは、城内で反乱を起こし、長続連とその一族の多くを殺して、上杉謙信とその軍勢のために城門を開いたと考えられています。畠山家のもろい統治は、終わりを迎えました。

上杉謙信は、七尾城と能登国の支配権を、遊佐続光に与えました。翌年、上杉謙信は(おそらく病気で)急死し、織田信長が能登に攻め込みました。続光とその息子は信長に降伏したが、長家の暗殺の実行に加わったことで処刑されたとされています。